

# 静かに溶けていった華人の末裔

## 末成道男

すえなり みちお / 東洋文庫研究員、元 AA 研共同研究員

ふつう華僑のイメージは、貧窮にあえぐ華人庶民が中国で生活に追いつめられ、家族を残して故郷を離れ、数々の辛苦をなめながら奮闘の末に一財産を築き上げ、めでたく帰郷、一族の祠堂や学校などのために巨額の寄付をして錦を飾るというサクセスストーリーと結びついている。しかし、こうした一握りの成功者の陰に何百倍、何千倍もの人々が、移住地でも困窮したまま故郷に帰るだけの財を築けず現地で一生を終えたり、現地社会の成員となることを選択したりしていることを忘れてはならない。現地では、こうした厳しい状況に対処するため、父系親族の集まる「宗親会」や、広東や福建など出身地を共にする人々の組織である幫を組織し、会館や共同墓地をもうけ、中国系であることの証しとし、移住

先社会での生活を送る者も多い。かれらは、例えば店の表示の一部に漢字を使うなど「中華」を旗印に背負っているため目につきやすく、多くの研究がなされている。しかし、一方では、中国系の子孫であっても、こうした活動に参加することなく、静かに現地社会に溶け込んでゆく者も居る。通常、これらの者は目立たない上、時間が経つほど一層現地人との見分けがつきにくくなる。ここでは、ベトナム最後の王朝の都であったフエでの調査を通して、こうした



たステレオタイプ化していない方の例を紹介し、その意味を考えてみたい。

\*

フエでは、この6年あまりベトナム人口の8割を超える主要民族であるキン族農村を主な対象として調査を続けているが、サブテーマとして、比較的最近（2・3代前）に來住した華人および、17世紀末末に清に服するのを嫌って避難してやってきた明郷ミンフアンと称される人々を対象に、中国系移民の來た道沿いにその名残りが残っていないかどうかに関心をもって調査を進めてきた。主要調査村の清福チンフクは、南シナ海に面する順安海口から香江を通してフエに通じる水路の要所のひとつであったから、かれらの生活の痕跡があるかも知れないと、調査初期には、中国系移民についての口碑や墓石まで注意して探し回ったが、一向それらしいものが見あらず、大部分の祖先は16世紀北部の清化からやってきた純粋なキン族の村であり、かつて中国系移民が居住していた形跡は無いと結論せざるを得なかった。

ところが、清福近くキムトイの金堆村をたまたま通り過ぎた時、村の寺門両脇に天后宮と閩聖祠という2つの小祠があるのが目についた。「天后」と言えば、「媽祖」とも称され、沖縄の那覇にもあるように、中国福建起源の靈験あらたかな女神として、台湾でも最も人気のある神様である。閩公のほうは、義を重んずる三国志の英雄として華人系だけでなくキン族の間でも人気があり、必ずしも華人的特徴を示すとは限らないが、天后は、キン族にはほとんど受容されず華人系だけで祀られている。フエの明郷ミンフアン清河社に天后を祭る廟を建て、かれらのアイデンティティの拠り所としてきた。

ついに歴史文書に記録されていない、中国系移住過程の拠点を探し出せたかと、喜んで尋ねてみると、確かにこの寺の以前の住持は中国福建省より渡來した商人の息子で、この小祠は移住した当人の代に配置されたが、それほど古い時代ではなく、19世紀のことだとわかった。華人コロニーが、この寺を中心として存在していたという推測はあえなく潰れたが、その際、この華人住持の息子の一人が、清福村の寺の住持として招かれていったということを知って

調査地清福と、中国系移民がフエに來住するようになった主な経路と根拠地。





金堆村慧雨寺の天后宮と閻聖祠。天后とその侍神の像の顔は、新しく塗り替えられている。



清福寺本堂の女神祭壇と閻聖祭壇。ここでは、ベトナム戦争前からの神像が保存されている。



キン族風の仏教式忌祭を主宰する住持（左）。



驚いた。というのは、その息子の息子にあたる今の住持は、華人としては3代目ということになるが、これまでの付き合いで華人系であることを示すものは、漢字を知っているという以外一つ無かったからである。今のベトナムで漢字が判る者は希少であるが、仏教関係者の中ではそう珍しいことではないので華人であるとは思ってもみなかった。かれの水死した妻の供養儀礼も、タイクンという呪術師を招きキン族固有のやり方で行っていたし、12月の墓祀りや竈神送りも他の村人と特に変わったところはなく、キン族の伝統文化を濃厚に残している清福の一員として違和感はなかった。このことがわかって直接確かめた際に、家族祭壇を見せてもらうと、「周家歴代の祖」と漢字で書いた一枚板の位牌があり、キン族

とは異なるものであったが、一方、住まいの庭にはアムと称される夭折者などを祀る小祠が有る。これは、キン族の風習で、華人系では普通祀らないものである。

こうして、それほど昔とは言えない華人の末裔が、キン族の村にも従来の華人のイメージとはかけはなれた形で、村のキン族の一員として居住していることがわかった。

\* \* \*

さらに、この事例は、この地方の仏教系信仰のあり方についても、重要な示唆を投げかけている。仏教寺院が必ずしも仏教系だけでなく、別系統の神を祀ることがあるのは、別にベトナムに限ったことではなく、日本でも神仏混交のかたちで伝えられてきたが、清福の寺の住持の祖父によって持ち込まれた、天后、閻帝というペアで祀

るやり方が、もしかしたら、この地方の寺の神仏の配置に影響を及ぼしている可能性のある点である。

清福の寺の本堂の両脇に、女神と閻帝が祀られており、女神の方は、現在ではチャム系（東南アジア大陸部に居住するオーストロネシア語族に属する民族。ベトナム中・南部のチャンパ王国の末裔とされる。）の女神テンヤナーであると説明されているが、この像を観る限り、その従者は、天后の従者「千里眼・順風耳」の特徴を色濃く残っていて、テンヤナー神の従者らしからぬ風貌を備えている。つまり、地元の女神に中国起源の天后のイメージを重ねて伝えているのである。

未だ、この点については、十分な裏付け調査を行っていないが、もしこの推測が当たっているとすれば、静かに溶けていった華人がかれらの主観的意識とは関わりなく現地社会に及ぼしている影響力についての興味深い事例ともなるであろう。

\* \* \*

このようなタイプの、華人を名乗らず土着社会に溶けていった末裔と、ステレオタイプの華人性を意識し続けるものの代数を重ね次第にその特徴を希薄にしている末裔との比較もまた興味あるテーマであろう。いずれのタイプが、より強力に現地社会にインパクトを与えているかも、上例からすると必ずしも自明とは言えないのである。